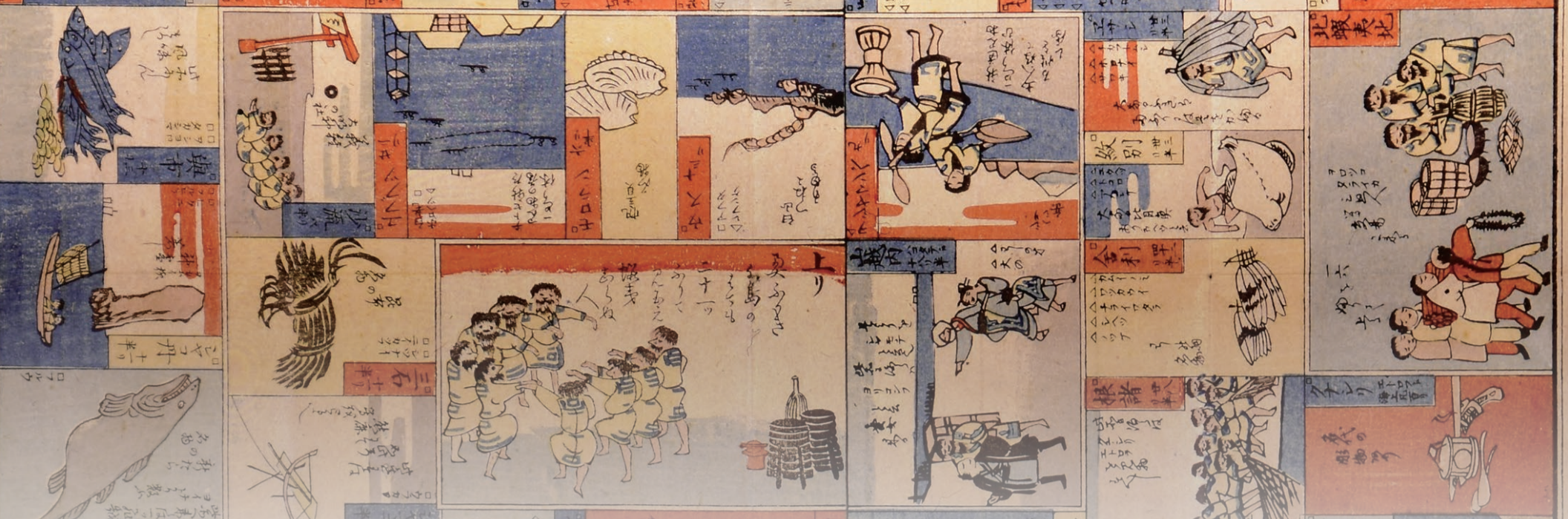


3 〈北海道らしさ〉のア・ラ・カルト



江戸時代終わりごろの北海道を描いた〈すごろく〉

壁に掲げられた大きなグラフィック。これは、サイコロをふりながら、箱館^{みなと}湊(現在の函館)をスタートして、日本海側からオホーツク海、太平洋沿岸を進み、ゴールをめざす〈すごろく〉というゲーム盤です。「北海道」の名称決定に深く関わった松浦武四郎^{まつらたけしろう}が、1864(元治元)年につくったものとされます。それぞれのコマには、当時の北海道の地名や海産物、アイヌ民族のくらしや習俗が描かれています。このすごろくを見た当時の人びとは、さまざまに北海道のイメージをふくらませたことでしょう。

「北海道」と聞いて、イメージするものは何でしょうか。まっすぐな道路、カニ食べ放題、野趣に富む温泉、ラーメン、ジンギスカン、テントを張っての海水浴、会費制の結婚式、そして方言。ほかの地域とは何となく異なった〈北海道らしさ〉は、まだまだたくさんあります。その土地その土地のお土産やおまつり、家庭の食事、さらには地名などにも、さまざまな〈北海道らしさ〉がただよいます。

例えば、地名をみてみましょう。とても多いのは、アイヌ語に由来する地名です。例えば「別」「内」「尻」などの漢字がついた地名がたくさんあるのは、「ペツ(pet)」「ナイ(nay)」「シリ(sir)」などのアイヌ語にそれらの漢字を当てはめたからです。本州の地名と同じ地名が多いことにも気づきます。開拓のために団体で移住してきた地域に、例えば「香川」などといった故郷の地名が付けられたからです。そのほか、地域にゆかりのある人名が地名になったり、まったく新しい地名が付けられた場所もあります。

〈これも「らしさ」って感じ?〉というコーナーも設けました。ここでは、何となく〈北海道らしさ〉が感じられそうなもの一品一品を、とにかくランダムに集めてみました。例えば、北海道で生産された〈やきもの〉には、アイヌの文様、アイヌの風俗、北海道の風景、風物など、いかにも北海道らしい絵柄が見受けられます。また、北海道では、郵便配達のとくに持つラップは〈クマよけラップ〉などとよばれ、明治時代から昭和40年代ごろまで使われてきました。冬季に便所で凍った糞尿^{ふんにょう}の山を突きくずす棒なども、寒冷地ならではの道具です。

北海道の独特な自然環境、本州とは異なる歴史、そして多様な人びとの行き交いの積み重ねのなかで、こういった〈北海道らしさ〉一つ一つが生み出され、育まれてきたものと思われ

ます。



おみやげと思ったら、クマ?

昭和のはじめごろになると、日本中で名所や温泉地などへの交通や宿泊施設が整えられていきました。北海道も、1934(昭和9)年に大雪山や阿寒^{あかん}が国立公園に指定されるなど、観光地として注目されるようになりました。そのころすでに、クマの木彫りはもちろん、アイヌの工芸品、毛織物や毛皮製品、海産物の加工品、乳製品、豆菓子など、たくさんのお土産が売られていました。戦後は、〈さっぽろ雪まつり〉〈YOSAKOIソーラン祭り〉といった新しいおまつりも各地で生み出されました。



なんだか、お腹すいてこない?

開拓をはじめて間もないころの日常の食事は、雑穀^{ざっく}を混ぜたご飯を主食とするなど質素なもので、贅沢^{ぜいたく}な料理が並ぶのは結婚式や行事の日に限られていました。また、何度も食料不足に見舞われてきた北海道では、〈シバレイモ〉のようないざという時のための食料が欠かせず、また、〈にしん漬〉やホッケの〈いずし〉といった保存食も、郷土の料理として定着していきました。一方で、かつて汁物の〈だし〉をとっていたウグイの〈焼き干し〉など、現在ではみられなくなった食材もあります。